月刊
みんぱく
国立民族学博物館
2010
6
月号
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成22年6月1日発行　第34巻第6号通巻第393号

特集◉
ペットボトルの世界

もくじ

1 エッセイ　世界へ◉世界から
これぞ永遠の悪循環
鹿島 茂

2 特集
ペットボトルの世界
ペットボトルの世界…… 久保 正敏
飲料容器としてのペットボトル…… 峯 孝則
ペットボトルと「ラッパ飲み」…… 相田 満
暮らしのなかのペットボトル
―西南中国の少数民族トン族の事例から―…… 兼重 努
ペットボトルから考える地球という器のなかの水
…… 中野 孝教

8 モノ・グラフ
伊勢型紙
吉本 忍

10 地球ミュージアム紀行
アイヌ民族博物館
アイヌ文化を伝承し紹介する唯一の総合博物館
佐々木 利和

11 表紙モノ語り
僧侶用水筒
栗田 靖之

12 みんぱくインフォメーション

14 人生は決まり文句で
「マリヤーデが欲しいのよ」
池亀 彩

15 時論新論理想論
「中心と周縁」はあるのか?
―イスラームの「周縁」をめぐる映像上映会報告記―
吉本 康子

16 多文化をささえる人びと
外国人支援の総合商社
―在日外国人情報センター
庄司 博史

18 生きもの博物誌
微生物がつくりだす日本酒
〈麹菌　酵母〉
岩谷 洋史

20 歳時世相篇
仏法の島の年中行事
スリランカのウェサック祭とポソン祭
杉本 良男

22 フィールドで考える
「らしさ」の多様性
津田 浩司

24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

エッセイ　世界へ◉世界から

これぞ永遠の悪循環

鹿島 茂（かしま しげる）

一年のうちに二度引っ越しをした。神保町から高輪へ、高輪から西麻布へ。こう書くと「神保町はわかるとしても、高輪や西麻布という《おしゃれな街》は似合わないじゃないか?」「意外と金もってるんだな」という反応が返るが、実情はまったく違うのである。

勤務先と古書街にも近いということで、神保町に八坪の事務所を月八万円で借りたのが二〇〇三年のこと。当時は景気のドン底で、商業地区の古い貸しビルは坪一万円を切っていたのだ。横浜の家に溢れた本を収容できるスペースを探していたら、灯台下暗しで、勤務先の近くに見つかったというわけだ。ところが八坪はたちまち手狭になった。毎日のように古書を買ってくるからだ。その結果、半年もしないうちに白山通りの反対側に一四坪の事務所を見つけて引っ越した。二年半後、同じフロアーの二〇坪へ。これにて安住の地が見つかったかと思ったが、甘かった。古書の増えるスピードにスペースの増加が追いつかないのである。おかげで二〇坪も完全に手狭になった。

そこで、更に広いスペースを探したところ、港区なら物件があるという耳寄りな話を聞いた。リーマンショックで高給取りの外国人が本国に引き上げ、外国人住宅の家賃が暴落しているというのである。かくして神保町から高輪へ。去年の七月のことである。だが、ここも安住の地とはならなかった。天井が高いのと窓が多すぎるため、冬はまるで外で暮らしているようなのだ。そのせいか肺炎にかかり、入院の瀬戸際に。かくてはならじと新天地を求め、西麻布に移った次第。この間、引っ越しにかかった費用は馬鹿にならない。すべての元凶は本にある。本のために広い家を求め、家賃捻出のために本を書き、資料の必要からまた本を買い……これぞ永遠の悪循環。これを断ち切るには、古書買いを止めなければならないが、それには物書きを止める必要がある。どうやらこちらも永遠の悪循環のようである。

フランス文学者。明治大学国際日本学部教授。
19世紀のフランス社会・文学を専門とし、当時の風俗を活写するエッセイの他、小説、書評、翻訳など精力的に執筆活動を行っている。古書コレクターとしても知られる。96年『子供より古書が大事と思いたい』で第12回講談社エッセイ賞を受賞、99年『パリ風俗』で第51回読売文学賞受賞。近著に『パリ、娼婦の館』（角川学芸出版）。

特集◉ペットボトルの世界

上方と江戸の両方に『水屋の富』という落語がある。海水塩分の多い井戸水に悩む大坂や江戸の下町には、それぞれ、淀川から、あるいは、神田上水や玉川上水からとった水を桶に入れ、両天秤で売り歩く「水売り」商売があった。この落語は、零細な行商人を主人公にした、やや切ない話である。その後、上水道の整備とともに水売りから水を買う習慣はすたれたが、昭和四〇年代以降、臭い水道水が問題となり、再び、水を買うという習慣がペットボトルと連動して広がった。そして今や世界規模に広がった新しい水の器、ペットボトル。開催中の企画展「水の器――手のひらから地球まで」で取り上げたペットボトルを、本誌でもさまざまな角度から考えてみたい。

久保 正敏
民博 文化資源研究センター

京都大学大学院工学研究科修了、工学博士。民族学に情報学を取り込む民族情報学を提唱、オーストラリア先住民コミュニティ成立史の研究などのほかに、時空間統合アーカイブズの重要性を提唱している。開催中の企画展「水の器――手のひらから地球まで」の実行委員長。

素材であるペットは、戦後間もない一九五三年に米国で発明されたポリエステルの一種で、ボトルへの利用以前から、当時の科学技術信仰のシンボルのひとつとして繊維に利用され始めた。現在では、生産される衣料用繊維の半数近くを占めるに至っており、それがボトルのリサイクルとつながる。また、トリアセテート・ベースの写真や映画フィルムが加水分解を起こし果ては雲散霧消すること（酢酸臭を発するのでビネガーシンドロームとよばれる）が一九九一年に判明してから、経年変化の少ないペットへの転換が進んだことも付言しておく。こうしたペットの技術的特徴について峯孝則氏から解説いただいた。日本におけるボトル入りミネラルウォーターは、食品衛生法の改正と臭い水道水を追い風として広まったのである。

「○○のおいしい水」など、ミネラルウォーターの命は、その取水地のブランドである。「ルルドの聖水」などの聖水にも通じる水の「ブランド信仰」が、ボトル水の普及と連動しているのは、世界中で共通するようで、企画展をひかえ多くの方々に収集をお願いして実現した世界のペットボトル・タワー展示を見ても明らかだ。

使う側から見れば、小型ボトルは個人携帯の水の器である。かつて地域の生活で水をえる場は水源であり、そこから大きな器から小さな器へと、人手を介して引き継がれ最後に手元に至る。泥の水であろうと、その生活空間にとって大切な場所だからこそ、水源への畏敬がさまざまな儀礼やシンボリズムを生み出してきた。しかるに、小型ボトルは水源と個人を直結する器である。取水地ブランドを信じるなかから、かつてのような水源への畏敬が失われていまいか。そしてそれは、水を飲むという身体動作の変化を促していまいか。

ひとつはラッパ飲みの普及であり、これは日本で論争の起きている紙パック飲料の「直飲み」にもつながる。自身の台湾ボトル収集に基づく相田満氏のラッパ飲み論考は、身体との関係を問う。また、ボトルの普及は、その流通にもかかわる。自動販売機の普及程度、冷蔵庫のサイズなど、ボトルの形や容量は、各地域での物流システムと連動するだろう。

ペットボトルはまた、軽くて丈夫な器としてさまざまに流用される。日本では、風車、子ども御輿、水ロケット、代用プランター、猫よけなどが知られるが、簡易な容器が求めにくい地域では大切に使われるし、生活に根ざした多様な転用例がある。そうした一端を、兼重努氏に解説いただいた。

一方、ボトル水のブランドではなく、中味のミネラルウォーターの水質は、地球環境ともかかわる。そのほとんどが降雨に由来する地下水を原水としているので、水質はその水が経由する環境の指標となる。中野孝教氏による水質に関する科学的解説は、地球環境への眼差しを促す。

このようにグローバルなペットボトルの普及は、自然科学と人文社会科学にまたがるさまざまなテーマをはらんだ現象である。それを考えるきっかけを企画展でも見つけていただきたい。

両天秤で売り歩く水売り。
『浪速風俗図絵』（杉本書店、1968年）より転載

京都三名水のひとつ、「染井の水」。最近はペットボトルを利用する姿が目立つ。梨木神社

プラスチック製の容器につめ「聖水」をもちかえる人びと。ルルド

飲料容器としてのペットボトル

峯 孝則
日本ミネラルウォーター協会 技術委員長
ミネラルウォーター類をはじめ飲用水全般について、法規、安全性、製造法、衛生管理、水質、地質、成分、栄養・生理、調理・料理と水など、幅広く調査研究をしている。

ペットボトルの歴史

一九六七年ころ、米国デュポン社がペットボトル製造の基礎技術を確立し、一九七四年、米国で世界で初めて炭酸飲料用に使用された。わが国では一九七七年、醤油の五〇〇ミリリットル容器に使用されたのが最初である。食品衛生法の改正によって一九八二年に清涼飲料水用、一九八五年に酒類（焼酎）用、二〇〇二年に乳飲料等に、そして二〇〇七年に牛乳容器等への使用が認められた。当初はゴミ散乱への危惧から業界が一リットル以上のサイズに自主規制していたが、一九九五年の容器包装リサイクル法の制定などの流れを受け、一九九六年には、五〇〇ミリリットル以下のものも生産されるようになり、一挙に普及した。個人携帯の容器としても認知されるようになったのである。

PET樹脂

プリフォーム

ペットボトルの製造法と特徴

ペット樹脂とはポリエステル樹脂の一種で、ポリエチレンテレフタレート（Polyethylene terephthalate）の頭文字をとりPET（ペット）とよばれる。エチレングリコールとテレフタル酸との縮合反応で合成されたペット樹脂は、射出成形機で熱溶解され金型に射出されて冷却の後、試験管の形をした透明のプリフォームがえられる（射出成形）。次にこのプリフォームをボトル用金型に入れ加熱して空気を吹き込み膨らませてペットボトルに成形する（ブロー成形）。

ペットボトルには、透明で光沢があり中味が見える、軽量で破損しにくい、酸素や炭酸ガスを比較的透しにくく保香性に優れる（ガスバリア性）、リシールができる、などの特徴がある。材質が炭素、酸素、水素の元素から成るため燃焼で発生するのは二酸化炭素と水のみであり、また酸素元素を含有することで燃焼カロリーは五五〇〇 kcal/kg と木材のそれに比較的近い。したがって、燃やしても焼却炉を傷めないし環境への負荷が少ない、という利点がある。

清涼飲料水での利用

全国清涼飲料工業会の統計から推測すると、清涼飲料水に使用される、ペット、スチール、アルミ、紙、瓶、その他の容器別シェアは、ペットが六〇パーセント強と最大である。全清涼飲料水の約一〇パーセントを占めるミネラルウォーター類については、日本ミネラルウォーター協会のホームページに統計資料が掲載されており、二〇〇九年のペットのシェアは九三・四パーセントとなっている。

環境への配慮

PETボトルリサイクル推進協議会の年次報告書によると、わが国では使用後のペットボトルは大半が回収され再生工場でリサイクルされる。リサイクル率は二〇〇八年で七七・九パーセントと、世界最高水準を保持し続けている。一方、ボトルメーカーや飲料メーカーではボトルの軽量化を継続的に推し進めており、数年前に比べ格段に軽量化が図られてきている。

栓を開けた後は

五〇〇ミリリットル容量など小容量のペットボトル入り飲料の場合、直接口をつけて飲まれることが多い。その場合、口のなかの微生物がボトル内に入ることがあり、時間が経つとボトル内で微生物が増殖し不衛生になりかねない。また、密栓状態で長時間放置した場合、特に夏の車中の場合には、ボトルが破裂することもある。できるだけ口をつけて飲まないことや開栓したら早く飲みきることが、開栓後のボトルの取り扱い上大切である。新型インフルの集団感染をもち出すまでもなく、ラッパ飲みは衛生面からはお薦めできないのである。

民博の収蔵庫でスタッフが着用している作業着の繊維にも、ペットボトルからのリサイクル品が利用されている

ペットボトルと「ラッパ飲み」

相田 満
国文学研究資料館 准教授
日中比較文学・人文情報学。著書に『和漢古典学のオントロジ』、編著に『古典キャラクターの可能性』『古典キャラクターの展開』『古典化するキャラクター』（いずれも勉誠出版）など。現在、歴史地名と暦日、観相と文学について研究中。

消えた水差し・ポリ容器茶

小型サイズのペットボトルの影響で消えたものは少なくない。

たとえば、演壇の水差し。壇上で実際に水を飲む人は珍しかったが、それでも演者の交代ごとに水差しを交換する気配りは不可欠だった。ペットボトルに座を譲ったのも仕方なかろう。

あるいは、駅弁と一緒に売られたポリ容器茶。熱湯入りポリ容器と日本茶ティーバッグがセットになったものである。土瓶茶を駆逐し、缶入り茶の登場にも負けずに命脈を保ったが、一九九六年まで自主規制されていた国内での小型ペットボトル飲料の製造販売の解禁により姿を消し始め、一九九九年の熱いお茶用ペットボトル容器の登場にとどめを刺された。

ポリ容器茶に駆逐された汽車土瓶
（水の器展展示品）

はんらんする「ラッパ飲み」

一方で、目にする機会が増えたのが、ペットボトルを手に「ラッパ飲み」をする姿だろう。特に、女性のラッパ飲みスタイルは、それを目にする方にも抵抗感が薄らぎつつあるのは特筆すべき現象である。

「ラッパ飲み」は、ヤカン・急須や瓶などの注ぎ口に直接口をあてて飲料を口に含む格好が、ちょうどラッパを吹く格好に似るのでつけられた呼び方である。この呼称の登場は明治時代からだが、それ以前に何と呼ばれたかが判然としない。

枡に盛った酒を直に飲む「枡飲み」、ふざけた飲み方の「てんごう飲み」など、酒の飲み方の呼称には、近代以前からのものも多く残されているので、「ラッパ飲み」に類する飲み方も、元来は飲酒儀礼と関連すると考えられる。しかし、詳細は不明である。

近代文芸作品に見える「ラッパ飲み」

試みに、文芸作品にあらわれる「ラッパ飲み」の描写を調べてみると、二十数例が検出できた。古くは明治三九（一九〇六）年の二葉亭四迷『其面影』から、昭和二〇（一九四五）年の終戦までは、ラッパ飲みされるものはすべて酒だった。戦後からは、水やサイダーなどのラッパ飲みも描かれるようになったが、どれも男の仕草であることは共通している。

ペットボトルからラッパ飲みする光景は、職場でも日常的になりつつある

何故か太宰治・坂口安吾など、無頼派とよばれた作家たちは、必ず一度はラッパ飲みをする情景を描いているのも興味深い。こうしたイメージが染み付いてきていたのだから、女性がラッパ飲みをする姿が敬遠されたのも当然だろう。

ところで、数年前、台湾で見かけたペットボトルには、初めからコップが付いていたので驚いた。筆者の知り合いの、中国人女子留学生も、今なおラッパ飲みには抵抗感があるという。確かに今でも香港・台湾には、コップらしきものをキャップにつけたボトルが売られているのを目にするが、これらは、ラッパ飲みを避けるべくデザインされたものと思われるのである。

香港・マカオで入手できる水のペットボトル

「ラッパ飲み」から「直飲み」へ

ただし、日本でも「ラッパ飲み」という言い方はどうも下品に響くのか、最近は「直飲み（じかのみ）」という言いかえ表現も使われはじめた。保冷保温機能付きで「直飲」と名づけた水筒や、機能説明の標語に「直飲み」をうたう商品も増えつつある。どうやら、女性ユーザに配慮して生まれたことばのようだ。中国語では「直飲」は、直接飲める水「浄水」の意味で使われているので、これはれっきとした日本語の造語である。こうした背景にも、蓋をすれば何度でも飲み直せるペットボトルの普及の影響は無視できないだろう。

暮らしのなかのペットボトル

―西南中国の少数民族トン族の事例から

兼重 努（かねしげ つとむ）
滋賀医科大学 准教授

六月二二日まで開催の民博企画展「水の器――手のひらから地球まで」に携わったのが縁で最近、各地のペットボトル飲料の受容と空きボトルの再利用法に関心を抱くようになった。

村に入ってきたペットボトル飲料

市場経済の急速な発展にともない、中国では近年、人びとの暮らしが大きく様変わりしている。一九九〇年代以降のペットボトル飲料の急速な普及もその一例である。中国では現在、多種多様なペットボトル飲料が売られているが、もっとも目につくのはミネラルウォーターや蒸留水である。中国では水道水の水質がよくない地域が多く、煮沸させたうえで飲んだり、別に飲み水を購入したりする人びとも少なくない。

筆者の調査している西南中国の少数民族トン族の村（広西・三江トン族自治県のA村）でも近年、村の店にペットボトル飲料が置かれるようになってきた。村での売れ筋は炭酸やヨーグルト飲料だ。これらは、現金収入が乏しい地元の大衆にとっては気軽に買える値段ではないが、ハレの日などの宴会の際には、婦女子や下戸（げこ）の男性たちを中心にそれなりの需要はある。大勢で一緒に飲むからなのだろうか、村の店に置かれているのは一・五リットル入りの大型ボトルが主体だ。

オートバイでも大型ペットボトルを携帯する

村の店にはミネラルウォーターや蒸留水はほとんど置いていない。A村一帯は、中国では珍しいことに、おいしくてそのまま飲める湧き水に恵まれており、わざわざお金を払ってそれらを買う必要はないからである。

供物台に置かれたペットボトル

村人たちのペットボトル再利用法

飲み終えたペットボトルはさまざまに再利用されている。A村ではそれに湧き水を注ぎ、野良仕事にもってゆくことが多い。瓶の口にはたいていヒモがかけてある。地元では徒歩で物を運ぶ際、天秤棒（てんびん）が活躍している。わざわざヒモをかけるのは天秤棒の端にペットボトル「水筒」をつるすためだ。

村では近年オートバイが普及してきたが、湧き水や予備のガソリンを詰めた大型ペットボトルをオートバイの横ポケットに入れて運ぶ姿をよく目にする。ペットボトルはオートバイと相性がよいようだ。

燃料タンクに代用されるペットボトル

オートバイに関連する、思いもよらないペットボトル再利用法に最近遭遇した。ハンドル付近に何故だか大型ペットボトルが装着されている。よく見ると、キャップの中央にあけられた穴からペットボトル内にビニール製の管が挿入され、その管はエンジンへと伸びている。ボトルの中身はガソリンだ。燃料タンクにひびが入り、ガソリンが漏れだすので、ペットボトルをその代用としているとのことだった。

ペットボトルは儀礼の場にも登場するようになった。今年三月に観察した住宅の棟上げ儀礼の供物のなかに小型ペットボトル二本を発見した。中身は酒と油のようだ。一九九三年以来現地で何度も儀礼をみてきたが、初めての経験だ。

世界各地で進んでいる、ペットボトル飲料の普及はグローバリゼーションの一環ととらえることができようが、人びとのペットボトル飲料に対する嗜好（しこう）や選択、そして空ボトルの再利用法には多少なりとも地域差があろうかと想定される。そこを掘り下げてゆけば、各地域の人びとの暮らしの特徴をあらたな角度からとらえなおすことができるかもしれない。今後とも観察と記録を重ねてゆきたい。

ペットボトルから考える地球という器のなかの水

中野 孝教（なかの たかのり）
総合地球環境学研究所 教授

専門は同位体環境学、資源地質学。安定同位体などを使って人と自然のつながりを読み取る「地球環境のトレーサビリティー法」の開発と普及を中心に活動している。

ポリ容器に従う無色透明な天然水

「水は方円の器に従う」。人が自然や社会の環境に影響されやすいことを、水が器によって形を変えてしまうことに例えたことばである。器の形だけではない。水はほんらい無色透明なので、どんな色にも染まってしまう。例えば、湖や沿岸は富栄養化すると、プランクトンの異常増殖により水は赤色（赤潮）や青緑色（アオコ）となり、漁業被害やカビ臭を引き起こす。生物だけでなく、鉄分を多く含む水は赤色に、硫黄に富む水は青色を呈する（図1）。色のついた自然の水は飲料に適さない。無色の天然水を透明なポリ容器に詰め込んだボトル水は、人びとに清潔感や安心感を与えている。

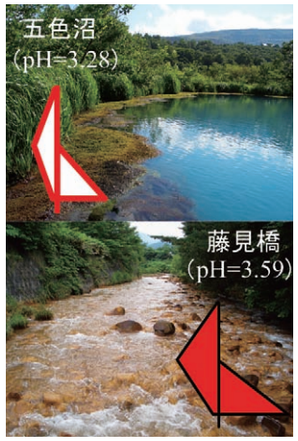


図1 硫酸酸性の五色沼と鉄サビの赤川（岩手県）

水質の六角形に見られる地域性

水はひとつの酸素（O）にふたつの水素（H）が結合したH_2Oという分子が集まった無機物である。けれども、そのような水は地球上には存在しない。水にはさまざまな成分が陽イオンあるいは陰イオンとなって溶けており、その組み合わせを水質という。主要な陽陰イオンをそれぞれ三種類にわけ、その濃度の多少を中心からの距離に応じた点としてあらわし、各点をつなぐと六角形（ヘキサ図）ができる。ボトル水の大半は、山や森に降った雨が土壌を通過した後、地下の岩盤や地層を流れる地下水を原水としている。日本のボトル水を分析し六角形であらわすと、その形や大きさが地域によって異なることがわかってきた（図2）。

この違いは降水の量と質に加えて、地質が強く関係している。地質は鉱物という結晶でできているが、酸性の水にゆっくり溶けるという性質がある。この酸は温室効果ガスである二酸化炭素や、酸性雨や富栄養化の原因である硫黄や窒素が水に溶け、炭酸、硫酸、硝酸になることによって生ずる。カルシウムやマグネシウムを含む鉱物は酸に溶けやすいが、その割合は地質によって異なる。大気からもたらされる酸性の降水に森と土そして地質が互いに関与し、ミネラル分を取り込むことによって、地域性あふれるボトル水の水質が生まれるのである。水質の微妙な違いは人の健康とも関係している。ボトル水は医療に使われたのには、地域の環境の独自性と健康状態が反映されている。水は単なる無機物ではなく、環境と共に生きている。環境改変が地球規模で進む現在、生物と同じように水についても、その地域的な多様性がもつ意味を考えるべきではないだろうか。

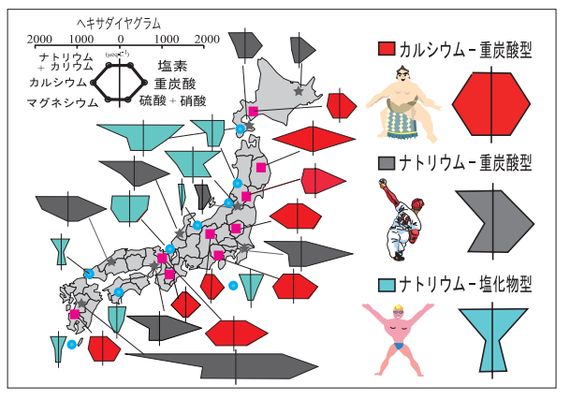


図2 日本のボトル水のヘキサ図

地球の器に従う水に慣れる

「水に慣れる」ということばもある。社会の制度や文化は地域によって異なり、人がその環境に適応するには時間や努力を要するという意味である。石油から生まれた容器に各地の水を入れたボトル水は、グローバル化を象徴するひとつの文化になっており、その手軽さに人びとはすっかり慣れている。けれども、石油文明がもたらした大量の炭素、硫黄や窒素の酸化物は、このボトル水にも溶けこんでいる。科学が進歩しても、人は変わりゆく地球という器に従わざるをえない。地球環境時代の水に慣れるためには、石油などの枯渇性資源に依存する現代社会を地域から見直すことも必要である。ボトル水を作る容器と水質の形のなかには、そのメッセージが込められている。

モノ・グラフ

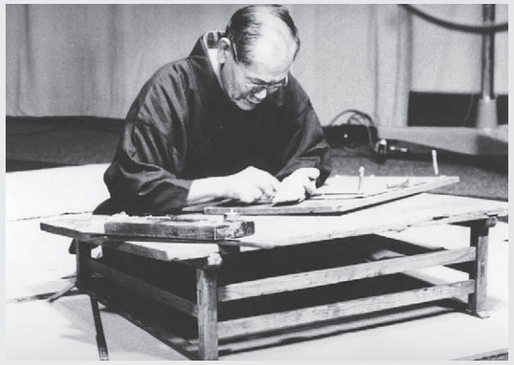
伊勢型紙

吉本 忍
民博 民族文化研究部
世界各地でテキスタイルを基軸とした民族技術の調査・研究をしている。現在は二〇一二年に予定している特別展「世界の織機と織物」（仮称）の開催に向けて、準備を進めている。

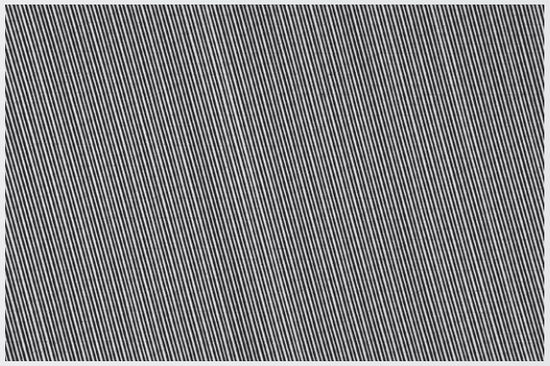
和紙を柿渋で貼りあわせた渋紙に、彫刻刀で模様を彫った染型紙を使って布面に糊を置き、その後に色染めをする型染は、日本の伝統的な染色技法である。江戸時代には型染が日本の各地でおこなわれ、染めあがった布はおもにキモノの布地として用いられてきた。型染に欠くことのできない染型紙は、伊勢の白子と寺家（三重県鈴鹿市）がおもな産地で、ここで彫られた染型紙は各地の染屋に供給されて、「伊勢型紙」の名でもてはやされてきた。明治時代以降の日本人の衣服の洋風化にともない、型染のキモノの需要は次第に減少し、必然的に伊勢型紙の需要も減っているが、その精緻な製作技術の伝統は、二一世紀の今もしっかりと継承されている。

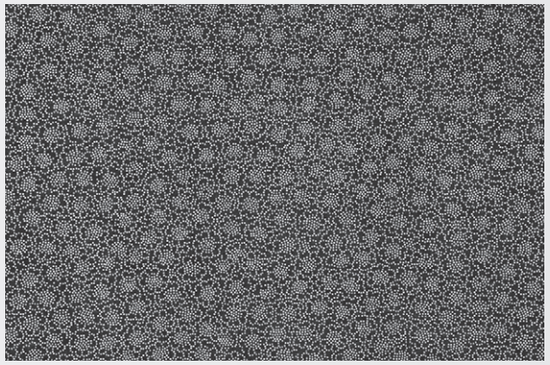
企画展「伊勢の染型紙」

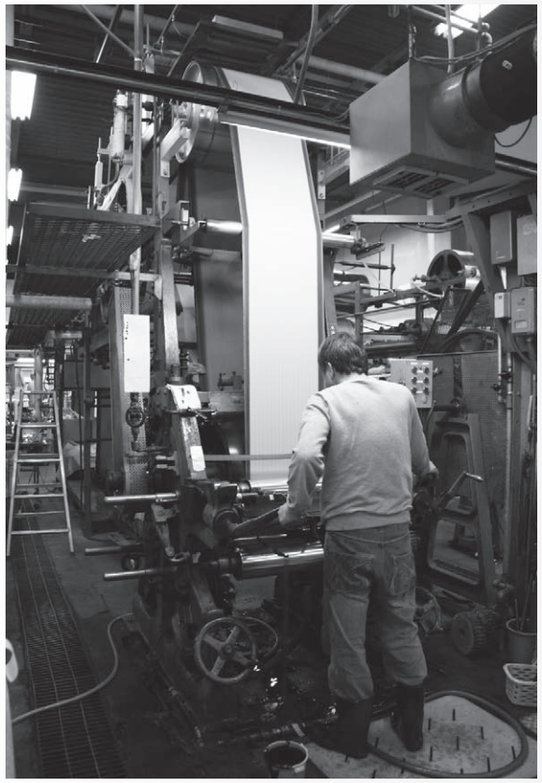
国立民族学博物館では、開館当初の一九七八～八〇年に、はじめての映像資料作成プロジェクトとして、館内のスタジオ、ならびに白子と寺家で、国指定の重要無形文化財伊勢型紙技術保持者（人間国宝）をはじめとする方々の縞彫、突彫、錐彫、道具彫などの彫刻技術と、型紙を補強するための糸入れ技術の映像取材をおこなうとともに、そのさいに製作された型紙を収集した。これまでに伊勢型紙のビデオ映像は、研究用映像資料として保存してきたが、その一部を今年の三月二五日から六月二九日まで、本館の企画展示場Bで開催中の企画展「伊勢の染型紙―映像と実物にみる匠の技―」で公開している。


児玉博氏による民博のスタジオでの伊勢型紙の彫刻（1978年）

この企画展は、江戸～明治の「伊勢型紙」、昭和の「伊勢型紙」、平成の「伊勢型紙」、機械捺染による「伊勢型紙」のデザイン、という四つの展示コーナーで構成している。最初の江戸～明治の「伊勢型紙」の展示コーナーでは、鈴鹿市が所蔵する江戸時代から明治時代にかけて使われたと見られる古い伊勢型紙二三点と見本帳七点を展示している。そして、昭和の「伊勢型紙」の展示コーナーでは、前記の映像資料（児玉博氏の縞彫技術、城ノ口みゑ氏の糸入れ技術、六谷進一氏の錐彫技術、中村勇二郎氏の道具彫技術、光永安一氏の突彫技術）と映像取材のさいに製作された製作工程ごとの型紙を、鈴鹿市の伊勢型紙技術保存会が所蔵する型紙の彫刻や糸入れの道具とともに展示している。さらに平成の「伊勢型紙」の展示コーナーでは、平成五（一九九三）年に、国指定の重要無形文化財伊勢型紙の保持団体に認定された伊勢型紙技術保存会の方々によって製作された伊勢型紙を、見本染めの布やキモノとともに展示している。そして最後の機械捺染による「伊勢型紙」のデザインの展示コーナーでは、伊勢型紙のデザインを現代のプリント技術で染められた反物とキモノを展示している。

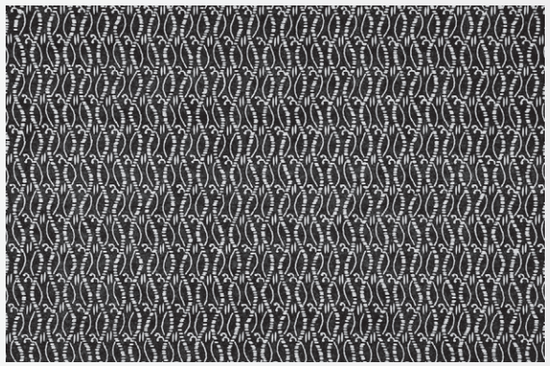

伊勢型紙1　縞彫（彫刻：児玉博 / 糸入れ：城ノ口みゑ）　国立民族学博物館蔵

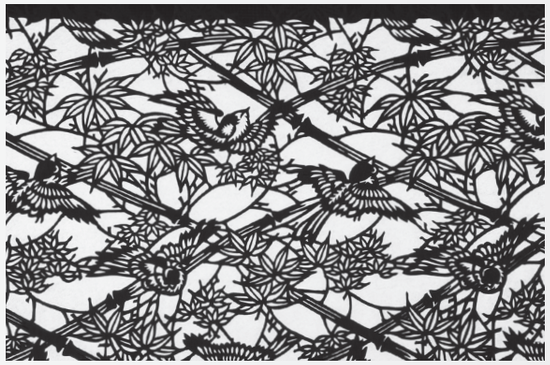

伊勢型紙2　錐彫（彫刻：六谷進一）　国立民族学博物館蔵


機械捺染による伊勢型紙のデザインの生産　服部染工（京都市）

手仕事への回帰

伊勢型紙は江戸時代に白子と寺家を中心とした伊勢の奄芸郡一帯が紀州藩領となった寛永一一（一六三四）年以降、徳川御三家のひとつである紀州藩の保護のもとで飛躍的な発展を遂げ、白子と寺家は日本全国の染型紙の中心的な生産・流通拠点となって繁栄した。しかし、明治時代になって紀州藩の保護がなくなるとともに、染型紙を使って染められていた武士の裃が姿を消したことなどから伊勢型紙の需要も激減した。その後、伊勢型紙の生産は、小紋柄のキモノの流行などによって一時的に活況を呈した時期があったものの、キモノの需要の長期的な低落傾向にともなって伊勢型紙の生産も減少の一途をたどってきた。そして、二〇世紀には染型紙に代わるスクリーン型（写真型）やロール型が出現し、機械化による大量生産の普及にともなって、伊勢型紙のデザインをロール型に置き換えた機械捺染（ローラー・プリント）でキモノ用の反物を染めるという安価な大量生産システムも一九六〇年代に登場した。これらのことは伊勢型紙の需要の減少をさらに助長することとなっていった。


伊勢型紙3　道具彫（彫刻：中村勇二郎）　国立民族学博物館蔵


伊勢型紙4　突彫（彫刻：光永安一）　国立民族学博物館蔵

しかし、近年のキモノの需要の極度の落ち込みは、機械化による安価な反物の大量生産すらも必要としなくなってきており、日本の伝統的なキモノの生産現場で研ぎ澄まされてきた伊勢型紙のデザインは、近い将来には一転して手仕事による少量生産に回帰せざるをえないという状況に立ち至っている。

アイヌ民族博物館

アイヌ文化を伝承し紹介する唯一の総合博物館

観光客でにぎわう北海道白老町のアイヌ民族博物館。
風光絶佳な地に建つこの博物館はアイヌの人びと自身が設立し、運営している。
多くの博物館と同様、経営状態が必ずしもよいとはいえない状況のなか、
その維持にむけたさまざまな努力がおこなわれている

北海道白老町。アイヌ語でシラウ・オ・イ（虻の・たくさんいる・所）に由来するこの町は、古くから大きなコタン（アイヌの人びとの集落）があったことでも知られている。シラオイ・ウン・クル（白老びと）とよばれていた人びとが、その地で独自の文化を育みながら生活をしていた。

博物館の設立

近代になって、交通の便利さもあってこの地を訪れる人びとは多く、コタンで伝統的なアイヌ文化に接していた。そうした経緯もあってか、その末裔たちはアイヌ文化の伝承・保存・調査研究・普及事業を目的に博物館を設立した。一九七六年のことで、当初は（財）白老民族文化伝承保存財団と称していたが、一九八四年に博物館を併設、一九九〇年には（財）アイヌ民族博物館と改称し、名実ともにアイヌ文化を常に伝承し保存し紹介する、唯一の総合博物館となった。

博物館外観

現在は展示施設としての博物館を中心に、野外博物館（コタンゾーン）には大小の規模の復元家屋（チセ）がならび、そのなかで館員たちが来館者にさまざまな伝統技術を紹介している。収蔵するアイヌ民族の文化財は五〇〇〇点におよび、さらにニブフなど近隣の先住民族の文化財などもある。

チセ

美しい景観と観光客への依存

アイヌ民族博物館はポロト（大きい湖）のほとり、背後には森林が連なるという風光絶佳の地に位置している。その景観はこの博物館の大きな宝物となっている。そして、隣接してイウォロ（伝統的生活空間）の再現計画により、あらたな景観づくりが進められている。ポロトをはさんだこの空間は詩情豊かな地として人気が高いが、しかし、その人気が必ずしも入場者の増加につながらないという悩みもまたある。

アイヌ民族博物館は、アイヌの人びとが自ら経営している。博物館の経営状態はどこもよいとはいえないが、この博物館は観光客が中心を占めているだけに悩みは深刻である。

公演（口琴）

公演（舞踏）

佐々木 利和
北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 教授
アイヌの人びとの歴史や民族誌を通時的に学んでいます。

公演（アットゥシ織り）

観光客が激減したから解散においこまれたという事態には絶対にしてはならない。

存続の意義

日本文化や日本の歴史・美術を紹介する国立の博物館は五館もある。琉球の芸能を紹介する国立の劇場も那覇にある。しかし、アイヌ文化を専門とする国立の博物館や劇場はひとつもない。アイヌは日本の先住民族である（ということを求める決議を国会はおこなった）。

この風光明媚な地に建つ、アイヌ自身が設立した博物館。この博物館を維持するためのアイヌの人びとの努力に、わたくしたちは手をこまねいていていいのだろうか。なお写真はアイヌ民族博物館の撮影である。

ムックリ（口琴）の体験

トンコリ（弦楽器）の学習

表紙モノ語り

僧侶用水筒
国名：ブータン　1984年収集
標本番号：H0126695

栗田 靖之
民博 名誉教授
2003年に退官。現在は「日本ブータン友好協会」の顧問として、ブータンとの親善に尽力している。

ブータンは、けわしいヒマラヤの南斜面にある山国で、パロや首都ティンプーといった主要な町は、標高が二四〇〇メートルほどの高さに位置している。

この国では、山の上のずい分高いところにまで白壁の堂々とした民家が点々と建っている。東に行くほどその傾向が顕著である。ひとつの理由は、低地や東ブータンの谷筋には、夏にはインド平原からの熱風が吹きつけマラリア蚊もいる。そのマラリアを避けるために、水の不便な尾根住まいをするようになったということである。

このような事情のほかに、ブータンでは、世俗を離れた断崖絶壁の中腹や眺望の良い尾根の上に僧院を建てていることが多い。それは僧侶が、修行としておこなっている瞑想に雑念が入らないような場所を選ぶからだという。しかし気になるのは、そんな場所で水はどうしているのだろうという疑問である。僧院には大きな仏壇があり、仏さまの前には毎朝、いくつもの容器に入った閼伽とよばれる水をお供えしている。

あるとき、山の上の僧院に向かう村人に出会った。その人は背中に籠を背負っており、そのなかには太い竹で作った何本かの水筒が入っていた。この村人は僧院に水を届けるのだという。僧院のお坊さんに水を届けるのは、わたしのせめてもの供物だと話していた。この人は、僧院に水を届けることで功徳を積んでいたのである。

ここで取り上げられた容器は、お坊さんが用いる水入れで、なかなか立派なものである。普通の人はこのような立派なものを水入れにするのはもったいなくて、酒を入れる容器として用いている。

企画展

「水の器―手のひらから地球まで」

生命の根源、水。民博所蔵の様々な器やペットボトルから地球規模まで、器を通して人と水の問題を幅広く考えます。
会期　六月二二日(火)まで
会場　本館展示場
※研究者によるギャラリートークをおこないます。
日時　六月一三日(日)
①一一時～一一時二〇分
②一五時三〇分～一五時五〇分

■関連イベント
地球研・市民連携ワークショップ②「びっくり！あなたの水もミネラルウォーター」
実施日　六月一二日(土)
時間　一三時三〇分～一五時
会場　第五セミナー室
※参加無料・申込不要
※対象は小学校高学年からです。
お問い合わせ
情報企画課情報企画係
電話　〇六―六八七八―八五三一
(平日九時～一七時)

「伊勢の染型紙―映像と実物にみる匠の技―」

江戸時代に流行した小紋染めには、おもに伊勢で作られた伊勢型紙が使われていました。映像資料とともに型紙を展示し、伝統の技を紹介します。
会期　六月二九日(火)まで
会場　本館展示場
※研究者によるギャラリートークをおこないます。
日時　六月一五日(火)
一四時三〇分～一五時三〇分

音のカ―夏のみんぱくフォ―ラム二〇一〇

●音楽の祭日二〇一〇 in みんぱく

一九八二年にフランスで、夏至の日にみんなで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんぱくも、八年連続して世界のさまざまな楽器を使った音楽で「音楽の祭日」を祝います。
実施日　六月二〇日(日)
時間　一〇時一五分～一七時
会場　特別展示館一階等
※参加無料・申込不要
お問い合わせ
情報企画課展示グループ
電話　〇六―六八七八―八五三一
(平日九時～一七時)

◆研究公演
公演とワークショップ「トランシルヴァニアの舞踊と音楽」
実施日　六月二七日(日)
時間　一一時～一五時五〇分
会場　本館一階エントランス
※参加無料・申込不要
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　〇六―六八七八―八一一〇
(平日九時～一七時)

◆国際研究フォーラム「文化遺産の返還とその再生―アラスカ州コディアク島の仮面をめぐって―」
実施日　六月二六日(土)
時間　一四時～一六時一五分
会場　講堂
定員　四五〇名
参加費　無料
参加申し込み方法
氏名・所属・電話またはFAX番号・E-mail・レセプション参加の有無を明記し、左記までお申し込みください。
お問い合わせ
研究協力課国際協力係
電話　〇六―六八七八―八二三五
FAX　〇六―六八七八―八四七九
E-mail　clifford.min@idc.minpaku.ac.jp
(平日九時～一七時)

◆吹田市制施行七〇周年記念事業「吹田の知　集結&発信」合同講演(四大学・一研究機関合同企画事業)
実施日　七月一一日(日)
時間　十二時～一八時
会場　メイシアター大ホール
参加費　無料
参加申し込み方法
住所・氏名・電話番号・人数・開催日を書いて、往復はがき、FAX、またはE-mailにて「吹田市事務局」までお申し込みください。応募者多数の場合は、抽選となります。
申し込み締切り
六月一九日(金)必着
お問い合わせ
吹田市制施行七〇周年記念事業実行委員会事務局
電話　〇六―六三八四―三一〇四
FAX　〇六―六三六八―七三四三
E-mail　info@suita70.jp

●無料観覧日のお知らせ
六月二〇日(日)は、音楽の祭日のため展示場を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園を通行される場合は入園料が必要です。

＊詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■齊藤玲子・大村敬一・岸上伸啓　編
『極北と森林の記憶―イヌイットと北西海岸インディアンの版画』
昭和堂　定価：4,410円(税込)
カナダ・イヌイットと北西海岸先住民が制作した約150点の版画（民博所蔵）の写真とともに、それら先住民版画の歴史や現状、特徴、技法、作家について解説を加えた本邦初の研究書である。

■青木文教　著
長野泰彦・高本泰子　編・校訂
『西藏全誌』
芙蓉書房出版　定価：15,750円(税込)
本書は当館アーカイブ「青木文教チベット資料」に含まれる「西藏全誌」の翻刻である。初期入藏者の一人、青木師は1903年からラサ市内に約3年間滞在し、ラサ市民の生きた営みを仔細に観察し、この民族史を著した。

友の会

友の会講演会（大阪）
会場●国立民族学博物館
第5セミナー室
定員●96名（当日先着順、会員証提示）

第385回　7月3日(土)
時間●14：00～15：30（13：30開場）
日本に暮らす外国人の今
―特別展「多みんぞくニホン」その後
講師　庄司博史(民族社会研究部教授)
日本の外国人登録者数は2005年に200万人を超え、その後も増え続けています。外国人スポーツ選手やテレビタレントの活躍、エスニックレストランや国際結婚の増加などもあり、日常生活において外国人に接することもめずらしいことではなくなっています。彼らは日本社会の中でどのように暮らしているのでしょうか。

第386回　8月7日(土)
時間●14：00～15：30（13：30開場）
企画展
「歴史と文化を救う」関連
被災した文化財が語りかける歴史と文化の記憶
講師　日高真吾(文化資源研究センター准教授)
※講演会終了後、企画展見学会があります

東京講演会

第94回　7月19日(月・祝)
時間●14：00～15：15（13：30開場）
チベット　ポン教とは何か
講師　長野泰彦(民族文化研究部教授)
ポン教は、仏教伝来以前からチベット文化域に広く分布している宗教で、チベット精神文化の基層を形成しています。ポン教の歴史や仏教との関連、現代におけるポン教の実態とポン教研究の意義についてお話しします。
会場●国文学研究資料館　大会議室
定員●200名（要申込、下記まで）
参加費●500円（会員は無料）
※講演終了後、懇談会と展示解説があります(会員限定)

第76回　民族学研修の旅
シベリアの森を歩く
―少数民族ナーナイの村を訪ねて
旅行期間●7月26日（月）～30日（金）
旅行代金●298,000円（燃油代等別途）
詳細は下記までお尋ねください。

国立民族学博物館友の会
電話　06-6877-8893
ファックス　06-6878-3716
電話でのお問い合わせは
月曜～金曜日9時から17時までにお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13:30～15:00(13:00開場)
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料
展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第385回　6月19日（土）
北タイの精霊ダンス
講師　田辺繁治(民博名誉教授)・
平井京之介(民族文化研究部准教授)
北タイでは、精霊が主として女性の身体に憑依してダンスを演じる祭祀が現在もおこなわれています。そのパフォーマンスの華やかで躍動的な美しさと、人びとを癒しや解放へ導く不思議な魅力についてご紹介します。

第386回　7月17日（土）
［新音楽展示関連］
聖人の力を伝えるガムラン
福岡 正太(文化資源研究センター准教授)
インドネシア、ジャワ島北海岸の町チルボンにあるカノマン王宮には、聖人の力を伝える楽器ゴン・スカティが所蔵されています。この楽器は、年に1回、イスラームの預言者ムハンマドの生誕祭に演奏されます。ゴングと鉄琴を中心に構成されるこのアンサンブルがもつと考えられている不思議な力について紹介します。

ミュージアム・ショップ

匠の技　伊勢型紙

現在開催中の「伊勢の染型紙―映像と実物に見る匠の技―」に関連し、伝統的な染型紙の技術を用いた色紙やしおりを販売しております。

渋紙に彫刻刀などで模様を彫り出した精緻で優美な匠の技は国の重要無形文化財に指定されています。この機会にぜひ手にとってご覧下さい。
※「染型紙の故郷」、鈴鹿市白子地区で活動されている「伊勢型紙技術保存会」のご協力で特別に商品を取りそろえております。

伊勢型紙色紙・小(1,200円)、大(3,000円～)

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ
電話　06-6876-3112
ファックス　06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

「マリヤーデが欲しいのよ」

ಮರಿಯಾದೆ
mariyāde　マリヤーデ
ಅವರಿಗೆ ಮರಿಯಾದೆ ಇದೆ
avarige mariyāde ide　アワリゲ　マリヤーデ　イデ（彼女は尊敬に値する）
ನನಗೆ ಮರಿಯಾದೆ ಬೇಕು
nanage mariyāde bēku　ナナゲ　マリヤーデ　ベーク（わたしに尊厳をちょうだい）

●お手伝いさんの世界

インドでお手伝いさんの世話にならないことは難しい。日本でお手伝いさんがいるなどと聞くとどんなお金持ちなのかと驚いてしまうが、インドの中流家庭であれば、朝晩、掃除や炊事の手伝いをしてくれる女性がいるのは当たり前のこと。それはまた、貧富の差がまだ根強くあることの証でもある。

わたしが王族の調査のために南インドのマイソール市で暮らしているあいだ、下宿先や友人宅、そして直接わたし自身が雇う事を通じて、何人ものお手伝いの女性たちと親しくなった。彼女たちはわたしの身の回りの世話をしてくれただけでなく、ことば遣いや礼儀作法、そして土地の風習や宗教儀礼について教えてくれた先生でもあった。

彼女たちの多くは学校教育を受けていないが、普段は男性とも同等にやりあうほど堂々としている。しかし、値札が読めないからスーパーに行くことができないし、文字を知らないのでガスの契約をすることもできない。書かれた文字の世界ではすっかり萎縮してしまうのだ。

●彼女にはマリヤーデがある

マハーデーヴィはわたしの知り合いのお手伝いさんのなかでももっともやり手の女性だ。タクシーの運転手をしていた夫が若い女性と夜逃げしてしまったが、その後もめげる事なく年老いた叔母と四人の子どもの世話をしていた。夫の浮気についてわたしにこぼしながら、「でもそんな夫ならいらないじゃない？」と言って、にやりとしたのが印象的だ。彼女は情に厚く、仕事をなくした女性に別の家庭を紹介したり、雇い主からセクハラにあった女性をそっとかばったりしていた。わたしは当時、植民地時代に藩王であったマハラジャが聖者などに敬意の印として贈る儀礼的な籠や傘などに興味をもっていた。こうした物品はマリヤーデmariyādeとよばれるのだが、マリヤーデの別の意味に遭遇したのは、お手伝いの女性たちがマハーデーヴィについて語っていたときだった。彼女たちは「マハーデーヴィにはマリヤーデがある」と言ったのだ。日本語に訳せば、「尊敬に値する女性だ」といったところか。

●わたしはマリヤーデが欲しいのよ

次にマリヤーデの表現を聞いたのは、若いお手伝いの女性リーラからだった。リーラは、恋仲だった男性を追ってマイソールにやって来て、彼が運転手をしていた家庭に住み込みのお手伝いとして働いていた。いわば押しかけ女房であった彼女は、ある日妊娠していることに気づく。しかし、リーラのカーストが彼氏のカーストよりも下だったため、彼氏の家族は大反対。リーラは結局、中絶することに同意させられる。さらに手切れ金の話まで出ていたようだ。仲間の女性たちが泣きじゃくる彼女を慰めているときに、リーラはこう叫んだ。「わたしはお金なんていらない。マリヤーデが欲しいのよ。」マリヤーデ、尊厳をくれということだ。男性の世界のマリヤーデが政治的地位を示す物質的なものなのに対して、下層の女性たちのマリヤーデには、形がない。

翌年、リーラに会うと、運転手の彼氏と結婚し以前よりもふっくらとしていた。噂に聞くと、お手伝い仲間たちが彼氏をうまく説得したらしい。

池亀 彩（いけがめ あや）
人間文化研究機構地域研究推進センター研究員
現代インド地域研究拠点研究員
専門は社会人類学。南インド、マイソール藩王国のマハラジャに関する歴史人類学的研究から最近はヒンドゥー教の聖者グルに関しての調査をおこなっている。

わたしの現在のお手伝いさんと家族。彼らは他州からの移民

下層の女性たちはとても信心深い

マハラジャが貴族の結婚式にマリヤーデとして贈った象

「中心と周縁」はあるのか？
―イスラームの「周縁」をめぐる映像上映会報告記―

二〇一〇年二月一三日と三月七日に、みんぱくで「映像に見るイスラームの〈周縁〉」と題する若手研究者の映像上映会が開催された。イスラームといえば中東、というイメージをわたしたちは既に構築してしまっていると思われるが、一五億人ともいわれる世界のムスリム人口の半数以上は中東以外のアジア、アフリカなどに暮らしており、また、中東にはムスリム以外の人びとも暮らしている。まずはそうした事実を、それぞれの研究者がフィールドで撮影した映像を通して知ろうというのがこの上映会の目的のひとつであった。

●さまざまなムスリム、イスラーム世界のキリスト教者

今回上映された映像は六作品。バングラデシュにおける割礼の変容を扱った作品（南出和余）をはじめ、中国・回族の葬送儀礼（今中崇文）、ベトナム・チャム族のラマダン（筆者）、トルコ・アレヴィーの儀礼ジェム（米山知子）など、儀礼やそれに参加する人びとに焦点を当てた作品が四本、さらに、インドネシア・西スマトラの伝統的身体技法について扱った作品（村尾静二）、イスラエルのアラブ人キリスト教女性のライフヒストリーを描き出した作品（菅瀬晶子）もあった。いずれも二〇分程度の短編である。

テーマや地域は多岐にわたっているが、どの作品もイスラーム世界のマイノリティ（アレヴィー、アラブ人キリスト教徒）や、中東を「中心」とした場合の地理的な「周縁」（バングラデシュ、中国、ベトナム、インドネシア）で生きるムスリムを対象としている。中東に暮らしたことのないわたしはこれらの映像に映し出された対象の「周縁性」に驚かされることはなかったが、その多様性は実感させられた。例えばコーランの読み方がそのひとつ。いわゆる一般的といわれるコーランの朗誦の仕方があるかと思えば、中国の回族が葬送儀礼の際に読み上げる京劇の歌のような節をつけた朗誦や、まるで仏教の僧侶が唱える念仏のようなベトナムのチャム族の朗誦もある。

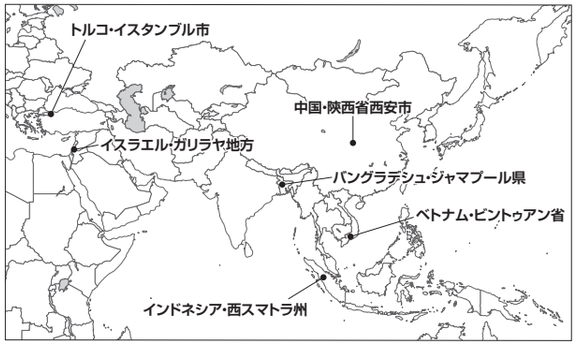
●「中心」を揺さぶる――映像というツールの可能性

「周縁」に着目することでそれぞれがもつ「イスラーム」の、あるいは「イスラーム世界」のイメージが揺さぶられる。会場からはこうした意見も聞かれた。また上映会の後におこなわれたディスカッションでは、はたしてイスラームに「中心と周縁」という設定は成り立つのか、という問題が提起された。確かに作品の制作者はそれが「周縁」であることを意識しながら撮影していたわけでないだろうし、登場する人びとも自らを周縁に位置づけているわけではないはずである。

そもそも、こうした議論が可能になるのは、映像というツールによって視覚的に対象がイメージされるからであろう。音、衣装、動作などを伴う儀礼や踊りを伝えるには、活字媒体よりも映像の方がはるかに説得力がある。イスラームという字面から各々が想像するイメージと視覚的に映し出されるイメージがあまりにも異なっていることに驚愕するという体験は、映像という媒体を用いてこそ実現できるものだろう。こうした議論を通して、映像というツールがもつ可能性を改めて感じた上映会であった。

吉本 康子（よしもと やすこ）
民博 外来研究員
専門は文化人類学。おもにベトナムでフィールドワークをおこない、村落の宗教や民間信仰について研究してきた。最近はメコンデルタ周辺におけるイスラーム化の展開について関心をもち、調査を進めている。

作品の解説をする村尾静二氏



各作品の撮影場所

多文化をささえる人びと

外国人支援の総合商社

―在日外国人情報センター

東京高田馬場。日本でもっとも多民族化の進んだ地域である。ここに在日外国人を支援するNPO在日外国人情報センターがある。前身を含めると日本で最古の外国人支援組織のひとつである。その活動から在日外国人のとりまく状況の縮図がよみとれる

庄司 博史
民博 民族社会研究部
言語学・言語政策論。二〇〇四年に特別展「多みんぞくニホン」を企画。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共・編著書に『多みんぞくニホン』、『ニホンの言語景観』など。

外国人の入居支援

在日外国人の登録者数が二〇〇万人の大台にのったのは二〇〇五年、つい五年前のことだ。それが今や二二〇万人をこえ、その数値はじつに日本の住民の一・七四パーセント、総数では、全国一七番目の長野県の人口に匹敵する。にもかかわらず、外国人にとって日本での住居探しは大きな困難のひとつとなっている。賃貸住宅の家主が「外国人はちょっと」と貸し渋ることが多いのである。理由の多くは民族や人種差別というより、文化摩擦やトラブルの際のコミュニケーションの難しさ、そして支払い能力への懸念が大半をしめるという。

ユーモラスな看板だが、不動産屋も外国人を無視できなくなったことはうかがえる。ここで家賃保証が役に立つ。（センターとは無関係）

東京にはこのような問題に対し、外国人の支払いに家主がいだく不安を家賃保証という形でバックアップし、さらにコミュニケーションなどのトラブルを軽減しようとする団体がある。「外国人生活サポート機構」といい、外国人の生活支援などをおこなってきたNPO「在日外国人情報センター」（以降、センター）が母体となって昨年立ち上げた外国人のための家賃保証団体である。借主から一定の委託料をうけとっておき、家賃滞納の際にそれで補填（ほてん）するというシステムである。センターの代表者・小池昌さんの話では、一九九六年、センターが都内の外国人を対象に実施したアンケートでは、外国人が入居するまで、平均一五件の不動産屋をあたるのが普通だったという。近年都心から人口が減少するなか、不動産賃貸市場は次第に外国人に依存し始めているとはいえ、生活や経済事情の不安定なアジア出身者にとっては画期的な出来事といえる。

防災情報ネットワーク

在日外国人情報センターの前身である在日外国人情報誌連合会EMPCが活動をはじめたのは一四年も前、一九九六年である。関西での大震災後、関東でも外国人への防災や緊急情報の伝達をスムーズにおこなうため、当時伸び続けていたエスニック・メディアが数社あつまり緩やかな連合体を作ったのがきっかけであった。以降エスニック・メディアを通して外国人への防災意識を喚起する他、被災外国人救援バザーやシンポジウムにより、日本社会にも活動の重要性を訴えてきた。その間、東京都の行政ニュースをながすチャンネルを作る過程で都との連携を深め、二〇〇四年、EMPCの代表者であった小池さんが都の地域国際化検討委員会委員に委嘱されたのを契機に現在の「在日外国人情報センター」に名称変更したのである。

エスニック・メディアの棚にはアジア系言語で発行される新聞がならぶ

現在センターは、防災情報をエスニック・メディアに迅速に提供するため都とともに二〇〇五年に設立した「東京都在住外国人向けメディア連絡会」の事務局をつとめているが、加盟メディアは一四言語、約四四タイトルをカバーしているという。その一部は、センター事務室の一角におかれ、常時閲覧可能である。近年は古くからのインドネシア語、フィリピノ語にくわえ、タイ語、ヒンディー語、ビルマ語、シンハリ語の新聞も棚に並びはじめ、ますます多言語化する在日エスニック・メディアの現状がうかがえる。

小池さん。
気負わずオープンな態度は性格の反映だろう

多民族的高田馬場

小池代表の他、事務局長の斉藤さんと数人の外国人スタッフできりもりするセンターの活動は、外国人への住宅支援や情報提供にとどまらずじつに多彩である。先にあげた入居にかんするアンケートもそうだが、幅広い支援外国人層やネットワークを背景として、外国人の抱える問題や需要調査を単独あるいは委託事業として実施し、行政やときには事業に反映させてきた。一方で、外国人に対して、入管問題や就職など個人的な相談にのったり、企業や個人の通訳・翻訳を請け負うこともある。また週の何日かは、事務所の半分をしめる会議室を日本語教室や外国人の集会所として開放している。

じつはセンターの位置する高田馬場周辺は住民の一割以上が外国人という新宿区のなかでも、外国人の集住度の高い地域である。コリアンタウンで有名な大久保周辺と中国人の集まる池袋に挟まれ、高田馬場では、さらにミャンマーやインド、パキスタン出身者も加わる。事実、駅の近くにはエスニックレストランがならび、外国人向け日本語学校の多さでは日本一という。ここに働き、学び、住む多くの外国人にとって、センターが頼れる存在となっているのは疑いない。在住外国人の多くは、やがて日本語を習得し、日本の生活にもなれ、なかには事業をおこすひともいる。しかし後続者の流れは絶えず、外国人支援の必要性は尽きることがない。センターは日本語講師や事務スタッフなどボランティアと活動資金の恒常的な不足にあるが、賃貸保証事業はひょっとするとセンターの経済基盤への貢献が期待できるかもしれない。

高田馬場駅の近くにはアジア系のエスニックレストランが軒をつらねる

原点は『カイビガン』

ところで、ここまでの話から、NPOとはいえ、センターが組織として、ボランティアと営利事業のあいだを渡り歩いているのが気がかりな方もいるだろう。しかし小池さんは飄々（ひょうひょう）としてそんなことは余り気にしていないようだ。外国人が人並みの生活ができる環境を作る、という目的優先の活動をおこなっているという自信がそうさせているのかもしれない。どんな非営利活動であっても、それを支える経営基盤は必要なのだ。公的資金や寄付のみに安住していた団体が資金源の縮小や枯渇とともに消えていった例は珍しくない。フィリピンで数年間の滞在後帰国し、フィリピン人向けの雑誌『カイビガン』を創刊して以来、今日も日本で最古のエスニック・メディアの編集にたずさわる。小池さんの活動が多角化しても原点を見失わない理由は、ひょっとしてここにあるのかもしれない。

日本語教室はボランティアの教師がささえてきた

◎「在日外国人情報センター」 http://gaikokujin-jp.info/

微生物がつくりだす日本酒

〈麹菌　酵母〉

日本酒は、直接にはその形を見ることができない微生物の力を利用してつくられる。麹菌と酵母。このふたつの小さな生きものは、原料を刻々と変化させていく

種麹。モヤシともよばれる。米に麹菌を培養し、胞子を着生させた後、乾燥させたものである

菌類の力

寒さが厳しくなるころ、酒蔵では新酒の仕込みがピークに達する。この時期、酒蔵全体は、芳醇な香りが充満している。並び置かれた巨大な発酵タンクに近づいて、耳をよくすませば、プチプチプチと聞こえてくる。生成される炭酸ガスの音だ。発酵が進行しているのである。

日本酒は原料である米を発酵させてつくる醸造酒である。よく知られているように、おもに麹菌と酵母のふたつの微生物によってつくり出される。麹菌によって生成されるデンプン分解酵素の働きでブドウ糖がつくられ、酵母がこのブドウ糖を取り込み、アルコールに変えながら増殖する。日本酒の製造は、この糖化とアルコール発酵のプロセスが同時に起こる並行複発酵を特徴としている。

複雑な工程

製造行程は、大きくわけて、麹造り、酛造り、醪造りと分業的であり、酒蔵内の所定の場所で個別に行われる。まず、麹造り。麹は、蒸した米に麹菌を繁殖させてつくられる。酒造りでは、麹がもっとも大切なものであるといわれている。次に、酛造り。酛は、完成した麹に、水、蒸米を加え、酵母を添加してつくられる。酛は、酒母ともよばれる。この段階で酵母の増殖がうながされ、発酵をすすめるための種のようなものになる。そして、醪造り。醪の仕込みでは、酛にさらに水、麹、蒸米が加えられるが、添、仲、留と三段階にわけておこなわれる。醪が発酵して搾られると清酒ができあがる。

現在、酒造りは機械化が進んでいるが、それでも、小規模の酒蔵ではかなりの部分を手作業でおこなう場合が多い。日の出前の早い時刻から仕込みの作業がおこなわれ、一日を通して、随時、世話をしていかなくてはならない。

見る、触れる、感じる

酒造りにおいては、微生物によって、素材が次第に変化していく過程を見ることができる。

麹造りでは、直接素材に手で触れる機会が多い。蒸米に種麹をふり、米粒ひとつひとつに菌が行き渡るように指先でこするようにして、植えつける。やがて、麹菌は発芽し、菌糸を米の内部に伸ばし、表面を白色に覆っていく。品温も徐々に高まっていき、できあがるまでに数回、手を入れて、ほぐしていく作業をおこなわなければならないが、その都度、触る感覚は違う。初め、固まりだったものが、次第にパラパラになっていき、最後は、米粒ひとつひとつが離れる砂状態になっていく。

一方、酛造りや醪造りでは、表面上でさまざまな表情をみせてくれる。とりわけ醪の発酵の際は、特徴的である。仕込み直後、表面は静かであるが、次第に小さな泡がでてきて慌ただしくなってくる。泡は、数日後には勢力を増していき、透明度のある泡からやや粘着性のクリーム色の泡になっていく。最高時になると、溢れんばかりになっていく。そして発酵終盤にさしかかると、泡が落ち、平らになっていく。このとき、醪は仕込み時に入れた蒸米が溶け、液体状になっている。

当然のことながら、これら小さな生きものは顕微鏡などの道具を使わない限り、直接、その形状を確認することはできない。直接的に知ることができるのは、常にそれらの活動の軌跡である。原料の米が時間をかけて徐々に姿を変えていくことを見ることで、微生物たちが生きているということを確認することができる。しかしながら、つくり手である人たちは、酒そのものがまさに「生きもの」であることを体感しているのかもしれない。

岩谷洋史（いわたに ひろふみ）
民博 機関研究員
専門は文化人類学。おもに、日本の酒蔵（清酒業）を対象にフィールドワークをおこない、仕事場で働く人たちの知識や技能、徒弟制に関する研究をおこなってきた。最近は、映像やコンピュータを利用した研究のあり方にも関心をもっている。

完成した麹。米粒ひとつひとつの表面が白く覆われる

協会系の酵母。アンプルで販売されている。これを培養し、酒母造りの際に添加する

留仕込み数日後の醪は、泡がようやく出始める。筋泡の状態になる直前

留仕込み後10日前後で、高泡の状態になり、泡の発生がピークに達する

酒蔵の仕込み蔵には、発酵タンクが置かれている（兵庫県明石市・茨木酒造にて）

麹菌

麹菌は麹から分離された有用カビの総称である。日本酒だけでなく、味噌の製造にも利用される麹菌は、ニホンコウジカビ（*Aspergillus oryzae*）に属するものである。ニホンコウジカビは、胞子着生が進むと黄色がかった緑色の胞子を形成することから黄麹に分類される。国内の多くの酒蔵が種麹製造専門会社から購入する。

酵母（清酒酵母）

*Saccharomyces cerevisiae*に属するものである。日本酒製造で利用される酵母は、アルコール発酵の際、炭酸ガスの泡を出す泡あり酵母と、出さない泡なし酵母に大別される。現在、さまざまな特性の清酒酵母が開発されているが、酒蔵では、おもに、日本醸造協会による協会系酵母が利用される場合が多い。

歳時世相篇 27

仏法の島の年中行事

スリランカのウェサック祭とポソン祭

人口の7割を仏教徒が占めるスリランカ。毎年6月、満月の日には、仏教伝来の逸話を伝えるポソン祭が盛大におこなわれる。グローバル化、ナショナリズムの進行など社会的変化のなかで、多様に変化する伝統的祝祭の今を考える

杉本良男（すぎもと よしお）
民博 民族社会研究部
専攻は社会人類学、南アジア研究。南インドの宗教、映画、ファッションなどに関心があり、最近は津波災害復興研究にも携わっている。

スリランカは人口の約七割が仏教徒で信者のほとんどはシンハラ人である。スリランカのシンハラ仏教社会では年中行事といえど、おおむね仏教暦に基づく仏教的な信仰に取り込まれている。日本のいわゆる常民の固有信仰、氏神信仰に深い関心をよせた柳田國男の眼に、こうしたスリランカ仏教社会の現状はどのように映るのであろうか。少し考えてみたい。

満月の祝い

日本ではお釈迦さまの生誕は四月八日の花祭りとして祝われるが、スリランカではそれが五月の満月の日にあたる。これはタイなど東南アジアの上座部仏教圏でも同様である。五月の満月の日のウェサック祭では、釈尊仏陀の誕生、成道、入滅の三つの祝いがまとめておこなわれ、六月の満月の日のポソン祭ではスリランカへの仏教伝来を祝う行事がおこなわれる。

仏教の伝統ではもともと月に四回ある満月、新月、半月の日をポーヤ（布薩）日とよび、熱心な信者は白い衣装を着て寺院にこもり僧侶と同様の戒律を守って一日を過ごす。一方僧侶にとっては戒律に照らして自らのおこないを反省する日である。スリランカでは現在満月のポーヤ日だけが国民の祝日になり、この日は寺にこもる人、夜におこなわれる菩提樹供養に参加する人びとなどが集い、仏の教えを再確認する。

ウェサック祭とポソン祭

スリランカの仏教徒にとってウェサックとポソンの祭は特別である。ウェサック祭の日はスリランカ中で特に盛大に祝われる。家々のまわりには燈明が燈され、仏伝（ジャータカ）の物語が芝居仕立てで上演されたりする。また、華やかな釈尊仏陀の像やヒンドゥー起源の神がみの像を運ぶ行列が出る。これは紀元前からおこなわれていた記録があり、五世紀初頭にインドを訪れた中国の法顕によるウェサック祭の記録でも行列のことにふれられている。

スリランカに仏教が伝来したのは紀元前二四三年の六月の満月のこととされている。当時のインド、マウリヤ朝のアショーカ王の命をうけたマヒンダ長老が将来したとされている。マヒンダ長老はアショーカ王の弟とも王子ともいわれるが、実際は西インドの仏教教団から派遣された僧侶だとみられている。当時のスリランカ王デーワーナンピヤティッサは長老と会見し、すぐに仏教に帰依してこれを保護することになったと伝えられている。ポソン祭はこうした伝承を人びとの眼に広く映るように年中行事のかたちにしたものである。

不殺生の教え

デーワーナンピヤティッサ王とマヒンダ長老の会見の物語では、不殺生の教えが重要な主題になっている。

王は山の神の化身であった鹿を追いかけてミヒンタレーまでやってきて、マヒンダ一行が投宿していたミッサカ山（ミヒンタレー）まで導かれた。ここで王はマヒンダから仏教の教えを受けて大いに感銘を受け、仏教を受け入れて王権が僧団を保護することにしたというものである。

ポソン月の満月の日には、この事績にちなんで今でもスリランカ北部の古都アヌラーダプラと近郊のミヒンタレーで盛大にこの日が祝われる。ただ、ウェサックのように国中で祝われるわけではない。

この物語では、王が狩りに出たときにこの地に導かれたことになっていて、一説には森の狩りの神への信仰がもとになっているともいわれるが、仏教のなかに巧妙に取り込まれていて、その原型を見つけることはむずかしい。

またポソンの日は仏教徒は動物を殺すのではなく、むしろとらえた動物を逃がしてやるのが風習になっている。この物語では仏教の不殺生の教えが強調されているのである。

観光化が進む仏教行事

スリランカではここ三〇年来国内での民族間対立が大きな紛争を招き、隣の大国インドとの関係もこの問題をめぐってギクシャクしてきた。グローバル化の進行の影響もあって社会は大きく変化をとげているが、当然祭も年々変わってきている。ウェサックの燈明は年々大きくなる一方で、今や祭のハイライトになっている。また仏の教えを芝居仕立てにした劇も以前からおこなわれていたが、年々教訓的な性格が強くなってきている。これはスリランカにおいて仏教信仰を民族意識の核におくナショナリズムが進行していることのあらわれである。

かつて中央高地農村で広くおこなわれていた豊穣祈願や厄払いの儀礼なども、踊りだけがクローズアップされている。年々観光的な要素が大きくなり、また学校教育にも伝統文化のひとつとして取り入れられて、一見盛んになっているように見えるが、もともとの宗教的な色彩はますます後退している。ヒンドゥー教や仏教の伝統が幾重にも折り重なってできあがっているスリランカの文化は、観光化の波を受けてかつてのすがたを想像することさえむずかしくなっているのが現状である。

アヌラーダプラの聖菩提樹に献花する信者<撮影・麻田玲>

フィールドで考える

「らしさ」の多様性

わたしたちは普通、「○○人」とよばれる人間集団はそれぞれ固有の「○○人らしさ」をもっていると考える。「華人」であれば「華人性」とでもよびうる何らかの核を受け継いでいるとイメージする。しかし、「華人が華人性をもっている」ということは、どこまで自明なことなのだろうか

津田 浩司
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教
専門は文化人類学。インドネシアの地方都市の華人コミュニティで、「華人性」がいかに経験され表出されるかを調査してきた。最近は同国の華人の宗教実践の変容に関心を抱いている。

インドネシアの華人

現在のインドネシア共和国に相当する地域には、古くより中国大陸南岸から渡ってきた人びとが住みつき、世代を重ねてきた。彼らのなかには、現地の人びととのあいだに混血を重ね、もはや中国語を話せなくなっている人もかなりいる。

しかしこの国の近現代史において、彼らは依然として「華人」と見なされ続け、よそ者扱いされてきた。彼らは「正統なインドネシア国民」を構成する土着の人びとではないと位置づけられ、徴づけられてきたのだ。とりわけ一九六六年に権力を掌握した第二代大統領スハルトの体制下では、華人はインドネシア社会に完全に「同化」すべきだとして、中国に由来するものや華人にまつわるもの、要は彼らがもっているとされる「華人性」を、公の場で表出することが厳しく禁じられた。こうした状況は一九九八年の同体制崩壊まで続いた。

それから一〇年あまり経った現在、インドネシアでは誰もが自由に「華人文化」を享受したり、また大々的に「華人性」を表明することができるようになった。春節のころには華人が多く暮らす都市部は赤い飾りつけで埋め尽くされ、また大概の町々にある寺廟（中国寺院）で催される祭も年々賑やかになってきている。

寺廟の祭で賑やかに演じられる龍舞

しかしフィールドで出会う「華人性」は、「華人が（それまで禁じられていた）華人性を表出する」といったような類のものばかりではない。わたしは二〇〇二年以来、ジャワ島北海岸に位置するルンバンという小さな港町の華人コミュニティで調査をしてきたが、人びとの実生活のレベルでは、じつにさまざまな「華人性」の在り方に出会うのだ。

「魂は華人だ」

ルンバンで生まれ育ったジャワ人男性スラマットさんは、長らく地元の華人家庭のもとで運転手兼印刷技師として働いてきた。ある年スラマットさんは、その華人の家族を乗せ百キロあまり離れた街にある有名な寺廟の祭を訪れた。そこで彼は同地の霊能師からおもむろに、「お前の前世は華人だ」と言われたという。さらには自身の名の漢訳として「ピンアン（平安：Ping An）」という中国名までつけてもらったのだそうだ。「わたしはジャワ人だけど、でも魂は華人なんだ。」日常を華人たちとの深い関係性のなかで過ごすスラマットさんは、折に触れ笑いながらそう口にする。

印刷屋で寺廟のお札を刷るスラマットさん

「本当は華人だけど……」

ルンバン町内の寺廟の番人リム・ペンシャン（林平祥）さんは、顔見知りのあいだでは「華人である」と認知されている。すでに亡くなった彼の両親は血統的に華人だったからだ。ただ幸か不幸か、彼の顔はいわゆる典型的な「華人顔」からは程遠い。

そのためペンシャンさんは、市場に行ったりバスに乗ったりすれば、まず周りから華人と見なされることはない。「華人だとお金をもっていると思われ、ふっかけられたりすることもあるが、この顔だとそれもないから悪くはないさ。」日焼けした顔を赤らめながらペンシャンさんは語った。

寺廟の番人、リム・ペンシャンさん

「世界で唯一」の漢字入りバティック

ルンバンの隣町ラセムで一九二九年に生まれたニョー・チュンヒェン（楊俊賢）さんは、四〇歳になったときに父のバティック工房を受け継いだ。ジャワ更紗の名でも知られるこの蝋けつ染めの布は、古くから東南アジア海域世界各地で同様の技術が培われてきており、二〇〇九年にはインドネシアが擁する世界無形文化遺産にも認定された。ラセムのバティックが特徴的なのは、歴史的におもに華人経営の工房で製作されてきたということであり、特に鮮やかな赤や花鳥などの写実的デザインで知られてきた。

一九九七年のアジア通貨危機以来、同地のバティック業者は相次いで店を畳んでしまったが、今なお経営を続けるチュンヒェンさんは、八〇歳を超えた昨年からあるひとつの試みを始めた。それは、バティックに漢字の詩句をデザインとして盛り込むことである。

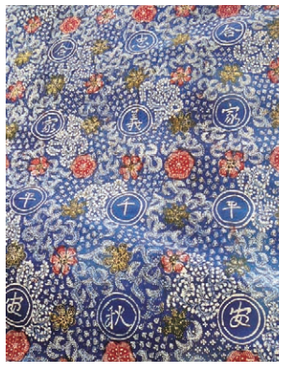
チュンヒェンさんが無地の綿布に「四海之内 皆兄弟也」、「合家平安 忠義千秋」などの文字を下書きすると、工房で働くジャワ人女性たちがそれを蝋で上書きし、さらには余白を細密模様で自由に埋めていく。この布を染液に浸たし、その後蝋を洗い流すという工程を数度繰り返せば、色鮮やかなバティックが完成する。

当初は、インドネシア文化の代名詞ともいうべきバティックにそれまでなかった中国的要素をあらたに盛り込むことに対し、チュンヒェンさんは躊躇いも感じていたという。また、近隣の町の華人のほとんどが漢字を読めないなか、これが売れるとの目論見があるわけでもなかった。しかし、地元自治体の要人が「面白い」とむしろ高く評価してくれたり、地元国立小学校が教員用の制服として大量注文をしてくれたりと、チュンヒェンさんの創意は想定していた華人の顧客の枠を超えて思わぬ形で消費・流通され始め、ラセムのバティックの「あらたな伝統」として注目を浴び始めている。

「これは世界で唯一の漢字が入ったバティックだ。他にどこを探したってないさ。」染め上がったばかりの布を干すジャワ人の妻の横で、チュンヒェンさんは誇らしげに胸を張った。

バティック工房のニョー・チュンヒェンさん

自慢のバティックを着て妻と共に


「世界で唯一」という漢字入りのバティック

さまざまな「華人性」

このように、ひと言で「華人性」といってもじつにさまざまなかたちがありうる。それは自己認識と他者認識のはざまで構築されたり、また要素としてあらたに見出され提示されたりもする。こうしたさまざまな文脈や関係性のなかで生きられ、創られ、そして主張される社会的現実としての「華人であること」や「華人らしさ」、ないし「華人性」の多様なあり方を、今後もフィールドの現場から明らかにできればと思っている。

編集後記

本誌連載中の「多文化をささえる人びと」シリーズは二年目をむかえた。前身の「外国人として生きる」をふくめると五年目になる。いずれも身近に住む外国人の存在に目をむけ、さまざまな境遇のなかで前向きにいきる外国人と彼らとともに変わりつつある社会を追うことを目指してきた。今回のシリーズはまた、彼らの生活や文化をささえるホスト社会の動きにも注目しつつ、昨年はおもに関西を中心に個人や組織のさまざまな活動を紹介している。そして今年は四月の朝鮮大学校を皮切りに、関東圏の活動をとりあげはじめており、ここしばらくはこのラインが続く予定である。このシリーズで紹介できるのはほんのひと握りだが、それらもまた多くの人びとにささえられていることを感じとっていただければ幸いである。

ところで、本誌は来月七月号から編集体制をあらたにするが、誌面構成やデザインも一新することになった。はじめての企画も登場する予定である。ご期待いただきたい。（庄司博史）

先月号（2010年5月号）「生きもの博物誌」の19ページに掲載したガラナの実の写真は、トウダイグサ科のJatropha gossypifoliaという別の植物の写真でした。お詫びして訂正いたします。

次号の予告

特集

世界のことば、ことばの世界

月刊みんぱく
2010年6月号
第34巻第6号通巻第393号　2010年6月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　佐々木史郎　庄司博史
中牧弘允　信田敏宏　山中由里子
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

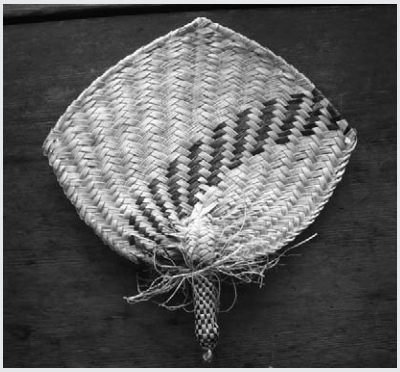
みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●予定時間　14時30分から15時30分（予定）。
●本館展示観覧料が必要です。
＊都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

6月の開催

6月6日（日）
話者：丹羽典生（研究戦略センター 助教）
話題：扇を通してみるオセアニアの世界
場所：オセアニア展示場



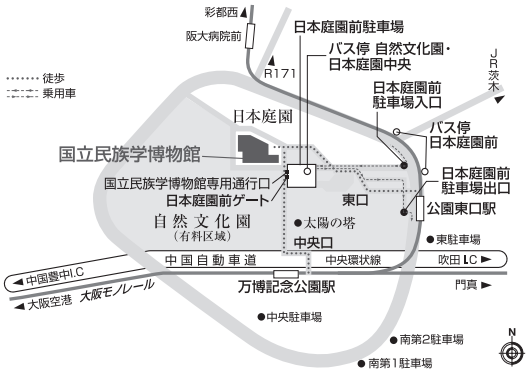
フィジーの扇

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00〜17：00）



交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/